露地抑制さやいんげんの作型

（園試南部分場）

1 背景とねらい

さやいんげんの普通作型（5～6月まき）では、収穫の最盛期となる7～8月が市場価格の最も安い時期にあたり高価格の期待が得られない。このため、比較的価格の上昇する9～10月どりの抑制作型の確立が望まれている。

一方、さやいんげんのわい性種による抑制作型は栽培期間が短く労力・資材等が少なくてすむことや、前作の跡地利用ができることなど畑の有効活用上有利な品目の一つである。

そこで、初霜がおそく、秋期温暖な沿岸および県南地方の気象を活用したわい性種の9～10月どり栽培について検討したところ、一応の成果が得られたので参考に供する。

2 技術の内容

1) わい性種を使用したこの作型でのは種限界はおよそ7月30日前後である（収穫期間が収量確保のため初霜前に最低30日間必要であり、は種から収穫開始までの積算温度が1100℃程度である。）（表-1、図-1、2）

2) 9～10月どりを中心としたは種期は下記のとおりである。（表-1 図-1）

は種期＼項目	収穫開始期	収穫最盛期	期待収量（kg/a）
7月15日	9月初旬	9月中旬	150
7月30日	9月中旬	10月上旬	150

3) 品種はキーストンカスケードとする。（表-2）

4) 適応地域　沿岸、県南の初霜10月20日以降の地帯

3 指導上の留意事項

1) は種限界の設定にあたっては、初霜が対象地域である沿岸部、県南部に該当する10月20日とした。

2) 適応地域外でも積算温度と平年の初霜日からは種限界の推定が可能である。

3) わい性さやいんげんは収穫最盛期の幅が短いため、は種期の組合せによる継続出荷が可能である。

4) は種期が高温期の場合、発芽むらや欠株を生ずることがあるので補植苗を用意するとともに、耐水性が弱いためほ場排水に留意する。

5) 栽培法は慣行による。

4 参考文献

昭和57、58、59年　岩手園試南部分場成績書

昭和56、57年度　野菜試験成績概要（東北、北海道）

5 試験成績

表-1　は種期別収穫期間と収穫開始期の積算温度

年次＼は種期	6月15日	7月15日	7月30日	8月15日
57	――	9・2～10・6（1072℃）	9・16～10・14（1043℃）	――
58	8・8～10・26（1024℃）	8・31～10・26（1042）	――	――
59	――	8・28～10・19（1089）	9・19～10・29（1138）	10・15～11・5（1089℃）

表－2　収量と品質（昭和59年）

は種期	品種名＼項目	収量（kg/a） A級	B級	くず	A+B	指数	平均重 A+B(g)	品質（%） A級	B級	くず
7月15日	キーストンカスケード	110.5	27.7	22.6	138.2	121	6.76	68.7	17.2	14.1
	さつきみどり	85.8	27.7	31.1	113.5	100	7.82	59.4	19.1	21.5
7月30日	キーストンカスケード	163.5	43.4	38.4	206.9	129	6.96	66.6	17.7	15.7
	さつきみどり	123.3	36.4	31.1	159.7	100	6.55	64.6	19.1	16.3
8月15日	キーストンカスケード	67.3	13.8	5.1	81.1	116	5.72	78.0	16.0	6.0
	さつきみどり	43.7	23.3	12.5	67.0	100	5.82	54.9	28.3	15.8

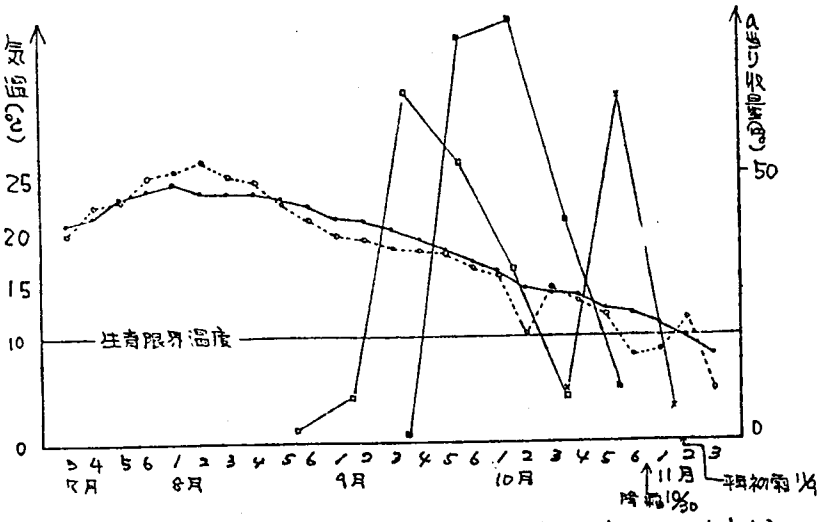

図-1．平均気温とは種期別時期別収量（59年キーストンカスケード）

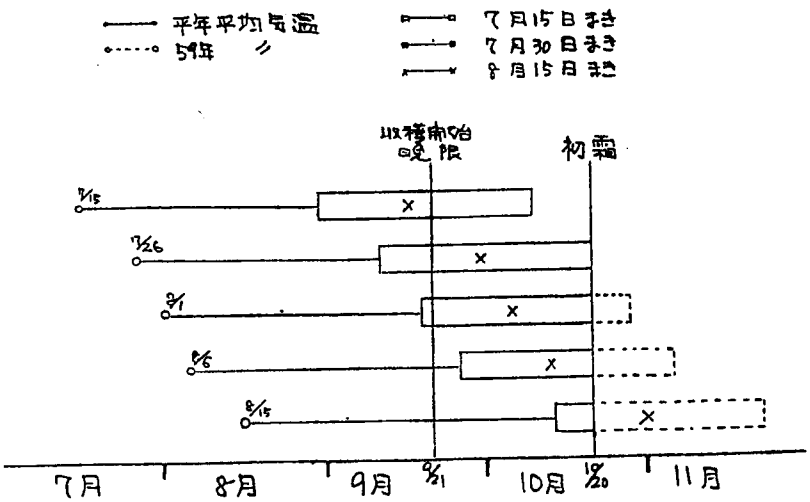

図-2　作型モデル　○は種　□収穫期　×最盛期

初霜　10月20日

収穫開始までの積算温度　1100℃

収穫開始の晩限　9月21日（初霜までの収穫期間30日）